

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

奈良市東部の田原地区の北西部に須山という集落がある。3月27日、朝からネハンコという行事が行われた。

中学生以下の子供が集まって集落を一軒ずつ巡り、お菓子をもらうのだが、参加したのはこの春中学を卒業したばかりの今西花恋さん一人だった。大きな紙袋を持って、父親の誠さんと一緒に午前9時過ぎから家を回り始めた。玄関を開けると婦人たちがお菓子などをくれる。「大きならはったなあ」、「高校生になったららがんぼってな」と皆さんが励ましの言葉をかける。父親は「長い間ありがとうございまして」とお礼の言葉を述べている。夫婦で待つてくれている家もあった。回りの終わると、当番の家で炊いてもらったご飯を持って、集落の中ほどにある地蔵堂の敷地に祀ら

ている石の如意輪観音座像や役行者などの頭や膝や肩に、ご飯を盛り、使った箸を折り曲げて両肩に掛け、行事は10時過ぎには終わった。

昔は西と東の2組に分かれて家を回り、早くお菓子をもらい終わった方が先にご飯を石仏に供え、遅れると、一度洗い落としてから、また供えなければならぬので、競争のように早朝から回ったという。今は市販のお菓子だが、昔はキリコやカヤの実、大豆の煎ったものやカラ豆などで、しばらくおやつには困らず、楽しみだったという。当番の家では、昼・夜と食事を出していた。脚付きのお膳で巻きずしや干切り大根や揚げ、シヤガイモなどを炊いたもの

「ネハンコ」で如意輪観音座像に、ご飯を供える

奈良市須山町で志岐利恵子さん撮影



や、蒲鉾、高野豆腐、水菜などのおかずだった。後にはカレーなどになった。地元に生まれた

から抜ける者は、トゲの付いた箸でご飯を食べたという。釈迦入滅の日が2月15日、月遅れの3月15日に寺などで涅槃会が行われるが、それを子供が営む習慣が、奈良市東部から宇陀地方などに広がっていた。ネハンコとは涅槃講のことだろう。田原地区内でもあちこちで行われていた。家を回る時に、「ネハンのスズメ、10羽取ってホウイ」、「ネハンのスズメ、機屋へ隠れて炊食うてホウイ」などと唱えていたという。矢田原では、年長者をイグイと呼び、トゲの付いたタロの木の手でご飯を食べる所作をしたり、御飯を由に投げて、お膳で受け取るという変わった所作も行われるが、今は

中断している。子供が涅槃講を行うことを「子供ネハン」と総称しているが、いつから始まったかは、まだよく分からない。藤堂藩の無足人で、田原在住の山本平左衛門の日記の宝永7(1710)2月15日の条には、17歳以下の男子等が「涅槃勸」を行ったことが記されている。涅槃の勸め「が」涅槃のスズメの唱え言となり、子供たちが勧進や触れ役の役割を元は果たしていたのだろう。奈良市(旧都祁村)上深川でもかつては16歳の時にネハンのオヤ(親)の役を務め、これを済ましたら自分の財布を持つのだとされていた。

子供たちのネハンコ

楽しい役を果たして、子供仲間から卒業し、大人の社会に入る、こうした村落のシステムは注目値する。(奈良民俗文化研究所代表)